

令和 6 年度 学校自己評価

鈴鹿市立稲生小学校

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上×ICT活用	◆ 授業改善・教師の授業力向上 校内授業研究会の充実(生活科・総合的な学習) →全学年での研究授業の実施。全職員が授業公開1回以上、参観10回以上 →三重大学教職大学院との連携(成果と課題) ○ 全学年での研究授業、全職員が授業公開1回以上、参観10回以上を実施することができ、授業や教材の研究に積極的な教員が増えてきている。 ○ 三重大学教職大学院の准教授や学生に、校内授業研究会に毎回参加してもらい、教員とは違う視点から意見をいただくことができた。また、三重大学教職大学院元特任教授の市川先生には、年間を通して校内研修の指導をしていただいた。それらにより、地域素材を活用した授業づくりについて、たくさんの知識を得ることができた。 ○ 生活科・総合的な学習の時間では、地域を題材として学習を展開することができた。それらの授業を切り口にして、子ども自らが「問い」を持ち、学び続けることを大切にしたい研修を進めることができた。引き続き、子ども自らが問いを持てるような手立てを検証していく。 ※ 「総合的な学習の時間などでは、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り	・昨年度の活動に加えて、「教師の授業力向上」を加えたことは評価できる。三重大学との連携によって、外部からの視点で研修をするのは大変よい試みだと思う。 ・自ら「問い」をもち、追求していく学習が進みつつある。 ・「問い」を解決していく力は、すぐには育たない。一貫した指導が求められる。 ・児童は、ICT 機器の利用に慣れてきて、学年に応じて使いこなしている。 ・昨年度の改善点から「稲生小 ICT 共有 box の活用」の取組がされた。具体的な内容はわからないが、活用方法の共有により取組だと思う。 ・地域に出る時間をなるべくとれるように努めてください。 ・ICT 機器の活用について個々の差は仕方のないこと。少しでもさが少なくなるように。 ・授業参観を拝見し感じたことは、先生からの質問も子ども	・全学年での研究授業、全職員が授業公開1回以上、参観10回以上を実施することができ、授業や教材の研究に積極的な教員が増えてきている。その授業実践を通して、自ら問いを持つ力は、子どもたちに付いてきた様子も見られる。今後は、その問いに対して、自分なりの考えをもったり、考えを裏付ける事実を探したり、仲間と協働して調べ活動をしたりする探究力を育成していく。 ・複線型授業の意義や展開方法について、教員間で理解に差が見られる。学校として、どのような学習において複線型授業を行うのが有効なのか共有し、カリキュラムを作成していく。 ・教員間、学年間によって、ICT 機器の活用状況に差が見られる。どのように是正するか検討する。

組んでいますか。」の設問に肯定的回答 低学年 76.6% 高学年 75% △ 授業実践を通して、自ら問いを持つ力は、子どもたちに付いてきた様子も見られるが、その問いに対して、自分なりの考えをもったり、考えを裏付ける事実を探したり、仲間と協働して調べ活動をしたりする探究力は、まだ十分に育てられていない。 △ 学年行事等で、生活科や総合的な学習の時間において地域を題材とした学習の時間を十分にとれない学年が見られた。また、教員も、生徒指導等で地域に出て学ぶ時間を確保しづらい状況が見られた。 ◆ ICT機器の活用 →授業や家庭学習において、より効果的な活用ができる。 (成果と課題) ○ 児童の主体性を伸ばすことを目的として「個別最適」「自己調整」を意識してICT 機器の活用を行った。児童の学びや興味を深めるための活用を心がけると共に、中学年以上では、複線型の授業にも取り組んだ。複線型の授業の後のアンケートでは、自らの学びに主体性を感じ、学習に対して意欲的になるという傾向が見られた。また、深い学びについては、それぞれ学んだことを共有し他者参照することで考えに深まりをもつことができた。 △ 複線型授業の意義や展開方法について、教員間で理解に差が見られる。学校として、どのような学習において複線型授業を行うのが有効なのか共有し、カリキュラムを作成していく必要がある。 ○ 教職員のICT 機器の活用の仕方をより共有するために、「稲生小 ICT 共有 box の活用」と「ICT 研修」を行った。各学年に毎月のICT 機器の取り組みを共有 box に入れて職	もたちに考えさせるようなものであり、それに応じて、子どもたちもしっかり考え、自分の意見も言えていて感心した。先生も子どもたちに目配りもできるし、対応もできるし、子どもたちに寄り添っていているようにも感じた。母親だけでなく、父親の参観も多く見られ、両親で子育てという時代も感じた。 ・子どもたちが受けていて楽しいと思える授業であってほしい。それには、先生自身がやっていて楽しいと思う授業をお願いしたい。 ・参観日での観察後の意見である。板書での指導が明確であると、参観者にも児童にもよくわかるであろうと思った。子どもたちは参観日ということもあって、普段、読み聞かせボランティアとしていろいろなクラスの普段の姿を見ている私には「よそゆき」の姿を見せてもらった。集中しているよい姿を見せてもらえた。授業中の教師の声のトーンについての工夫があることもわかった。今後も、自ら考え仲間と協働して調べ活動を続けていてほしい。カリキュラムをしっかり作成して実行していただきたい。今後も児童の主体性を伸ばしていただきたい。 ・先生方が少ない時間の中で、切磋琢磨されているのがよくわかった。時間の確保が課題だと思う。 ・教員間、学年間によって、ICT 機器の活用状況に差が見られるという状況はよくわかる。なかなか時間がない	
--	--	--

	員会議で紹介してもらうことで、各学年の取り組み状況を確認し、共有することができた。また、校内 ICT 機器の研修を行うことにより、教師の授業の引き出しを増やすとともに公務 DX のための ICT 機器の活用ができた。 △ 教員間、学年間によって、ICT 機器の活用状況に差が見られる。どのように是正するか検討する必要がある。	のが現状である。	
--	--	-----------------	--

家庭 教育 の 充 実	◆自主性、主体性を育む「家庭学習」の創造 ◆中学校区で連携した「スクリーンタイム」の削減 (成果と課題) ○ 家庭学習について、家庭学習について、PTA 家庭教育学級からいただいた意見をもとに、職員で話し合った内容を、学校だよりで発信し、家庭に協力を依頼することができた。 ○ 家庭学習がんばり週間の継続的な取組と周知により、期間中前向きに学習に取り組む家庭が多く見られた。 ○ 高学年では、自主学習ノートの活用によって、自分の興味関心に応じて、主体的に学ぶ姿が見られた。 △ 家庭学習がんばり週間以外にも、継続して取り組んでほしいが、学習習慣の定着が難しい家庭も見られる。 △ 自分で課題を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組むことが難しい児童への支援が十分にできなかった。 △ 家庭によって取組に差が見られる。	・ICT 機器を利用した家庭学習が定着してきていた。 ・個人差はあるだろうが、自主学習の取組は今後も継続してほしい。 ・家庭の協力は不可欠だと思われる。難しい部分もあるが、個別に時々家庭での様子を把握したり、学校で支援したりすることも必要だろう。 ・家庭によって取組に差が見られる。そのような家庭への配慮。 ・両親が仕事で忙しい時代で、子どもたちも習い事等で忙しく、家族で過ごす時間が少ない中、家庭学習の時間をつくるのも子どもたちの気持ちの持ちようになってしまうのではないかと思う。低学年からの習慣になればいいのかもしれない。 ・「複線型授業」これからを生きる人にとって魅力的な授業のようですね。その授業を進める先生方の力量を期待する。 ・今後も高学年の自主学習ノートの活用で主体的に学ばせていただきたい。 ・学年によって違うのだろうが、音読のある国語の教科書は持ち帰るけど、算数等は全く目にしない。今の教科書が昔とは随分違うのを知る必要もある。	・学習習慣の定着に向け、家庭学習がんばり週間以外にも継続して取り組めるよう、PTA 家庭教育学級等と連携した取組を進める。 ・自分で課題を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組むことが難しい児童への支援について検討する。
------------------------------------	---	---	--

長期欠席対策	◆情報共有による早期発見 (成果と課題) ○ 朝の欠席、遅刻などはホワイトボードへ明記し、情報共有することができた。 △ 担任が不在の時や、出入りの授業などの時に、連絡なしで欠席している児童について、職員室への連絡ができていなかったことがあり、対応が遅れることがあった。 ◆「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」の活用 (成果と課題) ○ 連続欠席3日までに、担任から保護者に連絡をするなどの早期対応ができた。 △ 校内不登校対応担当の特支コーディネーターへの報告ができていなかったことが年度前半にあり、校内体制の構築に課題があった。 ◆仲間づくり ※ いじめの未然防止(アンケートより) 「いじめをしない、させないよう、友だちとともに考え行動している。」の設問に肯定的な回答 低学年 88.9% 高学年 88.7% ※ 「学校は、教育相談などを充実し、いじめや不登校の予防早期解決に向けて務めていると思いますか。」の設問に肯定的な回答 93.9% (成果と課題) ○ 定期的ないじめアンケート、各学年での人権学習等により約9割の児童が、いじめを自分事ととらえ行動に移せている。 ○ 今後も学校や学年での取り組みについて家庭への発信、相談についての案内、相談しやすい環境づくりに努めていく。 △ 低学年高学年ともに「行動に移せていない」と回答する1割	・多忙ではあろうが、マニュアル化して対応する必要はある。 ・「あいノート」の活用で児童の思いを知り、当事者の思いを尊重しながら、考えるきっかけとして児童全体に提起していくことは効果的である。「あいノート」に表現できない児童もいると思われるので、個別の対応も必要だろう。 ・多様な児童の実態に合わせた取組を進めている。 ・SNS によるいじめに対応できる体制を。 ・スマホ等、インターネットでのいじめが取り沙汰される今、大きな問題である。世の中、子どもたちにGPSがあったほうが安心とスマホを持たせたいと思う保護者の気持ちも理解できる反面、子ども同士のトラブルにもつながっていく。大きな課題だと思っている。 ・SLSの方、稲生小学校にもいらしたのですね。一般的な教職員以外の人たちのことも知らせてほしい。 ・子どもたちの心に寄り添える学校職員の心のゆとりも大切であろう。限られた時間を有効に使い、情報共有をお願いしたい。 ・「あいノート」の取組は大切だと思う。	・校内不登校対応担当の特支コーディネーターへの報告が徹底する校内体制の構築を行う。 ・低学年、高学年ともに「行動に移せていない」と回答する1割の児童がいるため、今後も「あいノート」や人権学習、道徳の時間を活用し、自分にできることを考える時間を設けたい。 ・いじめの認知について、教員の感覚をさらに研ぎ澄まして早期発見を進めるとともに、組織的な対応力を一層高める。
--------	---	---	--

	の児童がいるため、今後も「あいノート」や人権学習、道徳の時間を活用し、自分にできることを考える時間を設けたい。 △ いじめの認知について、教員の感覚をさらに研ぎ澄まして早期発見を進めるとともに、組織的な対応力を一層高める必要がある。 ◆SLS の活用 (成果と課題) ○ SLS が管理職、特支 Co、担任などに活動日誌を共有し、毎日の指導に活用できた。重要な内容については、学年でも共有した。 ◆チーム学校、チーム学年で「居心地のよい、安心安全な学級づくり」を支援 (成果と課題) ○ 「ほっとルーム」は、毎日利用している児童は2名、他にも不定期に利用する児童が3名ほどいる。 ○ 毎月の特別支援推進委員会で、各学年の「気になる児童」の様子を確認・共有した。また、各クラスの担任が「見守る子」を定め、人権部会において年間を通してその子の変化や担任の取組を検証している。また、週二回の職員打ち合わせや毎月の職員会議においても、児童の状況を報告し合っている。 △ 欠席30日以上の子児童(12月末現在)21名(帰国などを含めた人数)、昨年度は24名。 △ 10日以上の子欠席人数は12月末現在で99名。昨年度は76名。	・報告・連絡・相談で、チーム力を高めていただきたい。 ・昔と今では「いじめ」も変化しているということをもっと家庭に知らせていくべきだと思う。	
--	---	--	--

地域連携	○ 地域素材による授業の実施によって、地域に関心をもち、地域の方とつながろうとする子どもの姿が見られるようになった。 ○ 9月の校内全体研修会では、地域の方々を招き、各学年の生活科・総合的な学習の時間の単元構想を、地域の方々に説明し、双方（地域・学校）の考えを伝え合って、学習の意義・目的を共有し、二学期以降の授業実践に活かすことができた。 △ 地域行事への子ども・保護者の参加率は、十分とは言えない。参加に消極的な子ども、無関心な家庭も見られる。（意識の差が大きい。） ◆健全育成活動の連携 →ノーメディアデーの実践（成果と課題） △ 高学年になるほどメディア活用の時間が守られていないのが課題である。スマホ所有が低年齢化してきているため、学校でのメディア活用に関する指導を充実させる必要がある。また、各家庭においても、しっかりとした指導と監督が必要である。 →あいさつ運動（成果と課題） ○ 児童会の取組として、毎週金曜日の朝に、児童会役員や各クラスの代表委員が、児童昇降口前で「あいさつ運動」を実施した。 △ 形式的なあいさつをする子は増えたが、日常に生かせていない。あいさつの意義を考えたり、そのよさを実感したりする学習が必要である。	・校内研修で、地域素材を活用した授業づくりに取り組むことで、地域に関心をもつ児童が増えた。 ・地域と学校で単元構想について話し合うことができた。 ・様々な地域素材について、地域から提示しても、多忙な校務の中で、授業に活用することはなかなか難しい。 ・ノーメディアデーの時間を活用して何をしたかという情報交換などはどうだろうか。 ・PTAを通じて個々の家庭に指導ができるように。 ・私が会ったすれ違った子どもはよくあいさつができていた。 ・メディア活用は、まず大人が見本となることが必要ではないか。すぐにスマホを見る癖がついている姿を子どもたちは見ている。ノーメディアデーの時は、保護者も一緒に実践していけばいいかもしれない。 ・休日是一緒にいる時、孫たちも誰かとすれ違った時にあいさつしている。工事をしている方にもあいさつする時があり、戸惑うこともあるが、悪いことではないが、すみませんと声をかけて通ることもある。稲生小学校の子どもたちもほとんどの子がきちんとあいさつしてくれている。 ・地域行事へは、関心の有無で参加は違ってくるように	・高学年になるほどメディア活用の時間が守られていないのが課題である。スマホ所有が低年齢化してきているため、学校でのメディア活用に関する指導を充実させる。また、家庭と連携した取組も検討する。 ・形式的なあいさつをする子は増えたが、日常にいかせていない。あいさつの意義を考えたり、そのよさを実感したりする取組を検討する。
-------------	--	---	--

思う。関心をもってもらうには、どんな方法がよいのか考えなければと思う。

・あいさつは、日頃からの家庭での習慣、しつけだと思う。

・年度初めにたてた学年のカリキュラムを実践していただきたい。「地域のモノ・人とつながる学習計画」をもとに教師自らが考え、チームで協働して調べ続けていっていただきたい。

・児童会の取組を大切にして「あいさつ運動」を続けていっていただきたい。

・地域行事への子ども・保護者の参加率が十分ではないという状況は、各自治会でも同じようなことが課題となっている。

非 認 知 能 力 の 育 成	※「危険なことから自分たちを守るため、安全な行動をとっている。」の設問に肯定的な回答 低学年 92.9% 高学年 96.2% ※「学校やクラスのルールや決まりを理解し守ることができる。」の設問に肯定的な回答 低学年 92.1% 高学年 86.8% (成果と課題) ○ 安全な行動をとり、決まりやルールを守ろうとする児童が多数である。今後も、ルールやきまりを確認する場、定期的な振り返りを通して児童の意識を高めていく。 ※「何が良くて、何が悪いかを判断することができる。」の設問に肯定的な回答 高学年 90.0% (成果と課題) ○ 今後も道徳や学級指導などを通じて規範意識の向上につながる取組を継続していく。 ◆非認知能力アンケートの活用 (成果と課題) ○ 5月と11月のアンケートを比較すると、5・6年生では、【やりぬく力】【自制心】【社会性】に向上が見られた。学級づくりや授業改善の取組、運動会、宿泊学習、修学旅行といった活動での学びの成果だと捉えている。 △【自己肯定感】については、どの学年においてもわずかながら低下傾向が見られた。思春期に入り、自己を客観視する力や謙遜心が高まったことも影響していると思われるが、自己肯定感を高める取組を保護者や地域とも連携して、一層進めていく必要があると考えている。学校においては、子どもたちの意欲や努力を、教員だけでなく子ども同士も日々賞賛し合	・自己肯定感とは、他者から認められることである。つまり、「自分だけ」ではなく、他者を認めたり容認したりすることで、自分も認められる。学校での教師と児童、児童相互、家庭での家族関係などを見直すことが求められる。 ・読み聞かせ、図書ボランティアの活用は引き続き生かされている。 ・6年のビブリオバトルは新しい取組として取り入れていくとよい。 ・「謙遜心が高まった」は、子どもの成長のしるしである。 ・家庭でも危険なことが起こる可能性があることを想定し、ニュースを見ながら話し合っていくことも必要だと思う。一人ひとりが大切な存在であることを伝えて、子どもたちが自分を自分で守ってほしい。 ・読書のもつ「非認知能力」の育成を意識しながら読み聞かせボランティアをしている。選本の時にそのことを考え、クラスの反応を見ながら続けている。ボランティアのわずかな時間で「非認知能力」を養えるとは思わないが、子どもたちの頭の片隅に気持ちの残る本を選ぶようにしている。 ・地域でも「子ども食堂」開催の折に、幼児～シルバー世代までの楽しめる「読み聞かせコーナー」を開き始めている。地域と学校の連絡を密にしていけたらよいと希望	・自己肯定感については、どの学年においてもわずかながら低下傾向が見られた。思春期に入り、自己を客観視する力や謙遜心が高まったことも影響していると思われるが、自己肯定感を高める取組を保護者や地域とも連携して、一層進めていく。学校においては、子どもたちの意欲や努力を、教員だけでなく子ども同士も日々賞賛し合い、自信を高められるように努める。 ・学校アンケートでは、読書について肯定的な回答が半分程度であり、課題が見られる。今後も、読書への意欲を高める活動を考え、取り組み、読書時間の確保も行っていく。
--	--	---	--

	い、自信を高められるように努めていきたい。 ◆読書活動の推進 (成果と課題) ○ 今年度の主な取組は、地域の方による読み聞かせ、先生や図書委員のおすすめの本、親子読書や読書チャレンジなどの読書イベントの実施、多読賞の贈呈、新校舎階段下に移動読書館の新設。地域の方、図書巡回指導員と連携して、本に触れる機会をつくることができた。また図書委員を中心に読書イベントを計画・実行することができた。 ※「お子さんはすすんで読書をしていますか。」の設問に肯定的な回答 49.5% (成果と課題) △ 肯定的な回答が半分程度であり、課題が見られる。今後も、読書への意欲を高める活動を考え、取り組み、読書時間の確保も行っていきたい。目標冊数は44冊であるが、1月現在の子ども一人あたりの年間冊数は、33.4冊である。	をもっている。 ・新館1階に新設した図書コーナーはとてもよいと思う。	
--	--	--	--

職員・職場の育成	◆「チーム稲生小」「チーム学年」として、主体的・組織的に行動する教職員、職場づくり →1日15人以上との会話の達成(週3日以上達成) ※(教職員アンケートより)達成できたと回答した職員 66.7% (成果と課題) △ 主体的・組織的な行動ができるよう、年度内にも体制の見直しや報告システムの改善を行ったが、今後も一層風通しの良い職場づくりに努め、報告・連絡・相談の徹底を図っていく。 ◆健康で前向きに働ける職場づくり ※月45h、360hを超える時間外労働のべ24人(12月現在) ※定時退校日の定時退校者 97.9%(12月現在) ※60分以内に会議を終了 100%(12月現在) (成果と課題) △ 本年度の反省を活かし、行事等の年間計画をしっかりと見直すことで、繁忙期が生じないようにする必要がある。 ◆職員の意識改革 (成果と課題) ○ 業務と自己研鑽との違いを理解し、職員一人ひとりが業務の効率化を意識した働き方ができつつある。また、自ら進んで自己研鑽(自主研修)に取り組む教員が増えてきた。 ◆SSS、SLS、学習指導員、ボランティア等の効果的な活用 (成果と課題) ○ SLS(年間200時間×2人)、学習指導員(年間30時間)を効果的に活用できた。今後も業務の効率化、教育活動の保護者・地域との共助を一層推進していく必要がある。 △ SSS(年間700時間)の有効な活用法について、さらに検討していく必要がある。	・「チーム稲生」「チーム学年」という観点は今後も続けていくことが望ましい。 ・昨年より時間外労働の人数が増えている。 ・地域教材の発掘、その他この評価書に挙げられていることなど課題は多い。また、コロナ以前の取組(家庭訪問・運動会・参観など)が戻りつつあり、この間の経験が少ない教員にとっては大変な負担になっていると思われる。一方、働き方改革の課題も重要である。したがって、重点課題を焦点化して取組を進めていくことが求められる。 ・マチコミメールの活用は、効果的である。Formによる欠席連絡も効果的だった。 ・データで引き継ぐという試みは効果的である。取組が終わったら、その改善案をすぐに残していくことは重要かつ効果的である。 ・データファイルの構成・整理は、教務担当か情報担当か、教頭か、いずれにしろ早急に明確にする必要がある。 ・先生の負担を少しでも減らす対策を。反面、子どもの対する時間が減らないように。反することかもしれないが。 ・データファイルの統一を。	・主体的・組織的な行動ができるよう、年度内にも体制の見直しや報告システムの改善を行ったが、今後も一層風通しの良い職場づくりに努め、報告・連絡・相談の徹底を図っていく。 ・本年度の反省を活かし、行事等の年間計画をしっかりと見直すことで、繁忙期が生じないようにする。 ・SSS(年間700時間)の有効な活用法について、さらに検討していく。 ・すべての校務担当者が次年度の改善案を作成しているか、点検ができていない。誰がどのように点検するか明確にする。 ・データ保存において、ファイルの配置を見直し、整理をする。
-----------------	---	--	--

	◆ICT の活用による時間削減 (成果と課題) ○ マチコミメール添付による、通信等の、保護者・地域への配付を実施し、業務の効率化を図った。 ○ 会議資料のペーパーレス化、クロムブック活用による職員打ち合わせ時間の削減を実施した。 ○ Form による欠席連絡で、朝の出欠確認作業を効率的に行えるようになった。 ◆教育活動や各行事直後の改善案作成 (データで次年度に引き継ぐ) (成果と課題) △ すべての校務担当者が次年度の改善案を作成しているか、点検ができていない。誰がどのように点検するか明確になっていない。 △ データ保存において、ファイルの配置を見直し、整理をする必要がある。	・ボランティアとして、必要であれば少しでもお手伝いできたらいいと思ってボランティアに登録させていただいている。 ・若い世代の教職員が増えてきているので工夫しながら限られた時間を有効に使っていただきたい。 ・地域コーディネーターとして、学校との連携をスムーズに取りたいので今後も引継ぎを含めて明確にしてほしい。	
--	--	--	--